九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

《研究ノート：コンスタン》セクシュアリテの謎（日記に即して）

高藤，冬武
九州大学言語文化部教授

https://doi.org/10.15017/9935

出版情報：Stella. 10, pp.131-136, 1991-10-24. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

《研究ノート：コンスタン》

セクシュアリテの謎（日記に即して）

高　藤　冬　武

バンジャマン・コンスタン（1767年，ローザンヌ ～ 1830年，パリ）は，その生涯の最も波瀾に富んだ，春秋マサニ盛ンナリの時期，1804年から1816年にいたる，人生渉難の期を綴った日記を残している（以下，コンスタンの日記からの引用は《 》によって示す）。日記は，途中4年の空白があって，通算9年に及ぶ。初めて完全な形で公刊されたのは，死後120年を経過した1952年のことである。ほかに，「アメリーとジェルメーヌ」と称する日記（1803年1月16日-4月10日）があるが，「私」の恋愛と結婚の省察録といったもので，日々の出来事を綴ったものではない。その，読者としての他人の目を意識しない，公表ということをまったく考えなかった赤裸な真情吐露，ヴィタセクシュアリス，或いは，男女間のいわゆる＜よのなか＞を繞る自己告白は，F・モーリヤックをして，「文学にあって，最も内面的な自己告白は，コンスタンの日記にこそとどめをさす。それに比すれば，ルソーからジッドにいたる告白は，使徒の自己賛歌にすぎない」と言わしめるほどである。記述の中心は，スタール夫人との《プラトニック》な悪縁と強いられた＜禁欲＞，かつて愛を誓った仲の人妻シャルロットとの再会とその後の結婚にいたる紆余曲折にあり，愛憎違順，苦と楽のはざまにたゆたう魂と肉体の記録である。

心と体の均衡を願う思いが，人並はずれた強い性衝動に翻弄されつつ，性欲処理の劃策に裏切られる記述は謎と矛盾にみちている。

《前から感じていたことだが，医者のビュチニから指摘されてはっきりした。女気を断つことは余の健康によくない。1804年6月11日》

《余の人生の混乱の最大原因は①の欲求にある。それは本当に狂気の沙汰である。いかなる犠牲を払うとも，それを満足させぬわけにはいかぬのである。同6月19日》（①は日記中の符丁で，肉欲の快を指す）

《余は，ほんらい，世のありとある女性よりも，ありとある恋愛沙汰よりも，学問

と孤独を愛すべき人間である。1806年2月5日》

1794年，スタール夫人と出会い，「その才気に眩き，快活さに魅了され，〔…〕一時間後，女性が，おそらくは，かつてふるったことがないほどの無限の支配力に，ぼくは屈した」（自伝的物語『セシル』）。夫人の傍らに侍って求愛の一年有半，ついに，許されて＜幸福な＞愛人となり，翌97年，娘のアルベルチーヌ誕生となる（日記には，アルベルチーヌの名が散見され，子を想う父の情が読みとれるが，親子関係を明かす直接の記述としては――《スタール夫人と結婚すれば，自分とアルベルチーヌの関係はポジティヴなものになる。1805年4月22日》――がある）。この頃，アルベルチーヌ出生の前後をもってして，二人の閨房での愛人関係は，ほとんどさたやみとなったもようで，後年はじまる日記中の回想にしばしばそのことの言及がある。しかし，コンスタンは，《空閨のしからしむるところの禁断症状》に心身を狂わせ，プラトニックな悪縁を呪いつつも，夫人の男勝りの才気と人柄の魅力に呪縛されたまま，「二人の接触は刹那にして絶えたが，その関係は激しく燃えて20年続くことになる」（ギラン・ド・ディエスバック）。――《スタール夫人の愛人であり続けて10年になるが，それは，ここ8年，絶えて夫人を愛したことがないからこそ続けてこられたのだ。1804年8月19日》――内容を問わぬ形式，形骸こそ永続するという，コンスタンの逆説的反省の謂である。

なぜ，数か月をもってして，「閨房のさたやみ」となってしまったのか。

> エレノールは，ぼくの生きる刺激と歓びではあったが，もはや，目的ではなく，絆となってしまった。（『アドルフ』）

この絆が束縛に変ずるのは時間の問題にすぎぬが，『アドルフ』のよく知られたこの一節は，じつは，コンスタンの＜生理哲学＞とでもいうべきもので，恋愛と結婚における男女の認識と行動のずれに触れた，次のような一文をはやくに残している。

> 女性は，いわゆる「おちた」と称されるあの瞬間の後，はじめて，明確な目的，女性にとって大きな犠牲的行為であるはずのものを男に捧げるやいなや，愛人として手離すまいという目的に目覚めるのである。男性は，反対に，まさにこの同じ瞬間に，目的を喪失する。目的であったものが，絆，束縛に変わってしまうのである。（「ジュリー・タルマ讃」 1805，6年頃執筆）

目的の達成もつかのま，やがて，関係が絆から束縛の様相を呈するとともに，幻滅が生じ，さらに，失う自由の大きさに驚く。のちの，再婚の相手となるべき人妻シャルロットを，13年の長きに渉り，分袂相逢，離別再会を重ねた果てに，我がものとしたその目的達成の欣喜雀躍の述懐――《このような気持は，じつに，10年ぶりのことだ。1806年10月26日》(10年前の感激は相手がスタール夫人)。――だが，この関係は，ひと月を経ずしてはやくも，呪うべき絆，束縛の苛立ちがうかがえはじめる。――《夜，シャルロットと。①。なんと！ 熱は冷めて，退屈の出番か。死ぬほど恐ろしいことだ。11月23日》――そして，翌朝――《嗚呼，まさにしかり！ 退屈の始まり》――10年前，スタール夫人を相手に同じ覚醒があって，やがて，コンスタンの身が間遠になった，閨房のさたやみは，こういう流れの中にあったのか。

ところで，《男・女》の異名をとったスタール夫人が，コンスタンの求愛をかわして一年有半，ついに身を任せるにいたったのは，評家の言を借りれば，以下の事情が考えられるという。「スタール夫人は，じつに男好きで閨の相手が欠かせず，また，じつに専横的で，男の保護者と任じ，支配したかったがために，恋に盲いてではなく，みずからすすんで身をまかせた」(L・デュモン＝ヴィルデン)。「たとえ魅力の劣る口からであれ，愛の言葉を聞かずには夜も明けぬ性格が，スタール夫人をして，コンスタンを見るに別の目をもってさせ，ついに，相手がかくもひさしく求めていたものを許す気にさせたのである」(ギラン・ド・ディエスバック)。それから8年，どのような＜よのなか＞の経緯を辿った果ての結果なのか，日記が始まる頃の二人の関係は，性ぬきの，白い関係となって久しいことが，その趣旨の一連の記述から明かされる。――《二人の関係を続けていくのは不可能。〔…〕どうにもできないわけがひとつある。自分には女が欠かせないが，スタール夫人は欲情しない。1803年3月2日》――《スタール夫人とのプラトニックな関係と，女なくして生きてゆけぬ我が身の悩みをどうすべきか，それが問題だ。1804年9月24日》――《自分には女の体が欠かせないが，スタール夫人は，その点では，もう無きに等しい存在である。同10月5日》――呪縛にちかい精神的紐帯をもってしても，《肉欲の快》を補うことはできず，外の《恥ずべき手段》(女ヲ見ル)にすがらざるをえない。これは，快楽と嫌悪感が表裏一体する，強いられた漁色の自己弁護のくだりである。

《余の女漁りを見て知っている連中は，余を潔癖さに欠ける男というだろうが，こ

のような悲しき手段に余を駆りたてるものは，じつは，不幸な女性〔スタール夫人〕に対する深い，純粋な愛情なのであり，その不幸な女性は見捨てるには忍び難たいからである。世間から非難される余の放蕩は，思いやりと犠牲的精神のしからしむるものであり，どんな男にもできるわけではない。だが，同時に，それが恥と不幸であるという思いは断ちきれない〔抄訳〕。1805年2月14日》（見捨てるとは，夫人との性ぬきの関係を解消し別の女性と結婚する，或いは，愛人関係にはいるの意である）。

このような記述を拾っていけば，「白い関係」は疑い得ぬ事実となろうが，ことは，いがいと複雑で，拾うべきもう一方の記述がある——《スタール夫人といても愛する気にもなれないが，夫人は友情関係にとどめたくないという。1804年9月9日》——《愛することをやめた男と，愛されることをやめたくない女の関係とは恐ろしい関係だ。1803年3月2日》——引用の後者は，『アドルフ』の有名なアフォリズムを予想させるものであるが，受動態「愛サレル」の動作主補語は，「愛スルコトヲヤメタ」男であり，二人の人間に係る「愛」の動作主は同一人であるから，二つの動詞「愛スル・愛サレル」は意味の上では一つ，そのコノテーション（＝暗示的意味。この場合は，個人的，感情的意味の膨らみ）において異同はない。ところで，男（コンスタン）の認識する愛のコノテーションは——《スタール夫人を愛さなくなって久しい。〔…〕余の心と想像力，とりわけ，余のからだが愛を求めている。1803年1月6日》——心と頭と体の三位一体である。《体が愛を求めている男によって》愛されたい，《友情の則（のり）を越えたい》となれば，《スタール夫人は欲情しない》をどう読むべきか。或いは，日記の記述に矛盾はなく，夫人の側の要求は愛情確認のための儀式ということになるのか。理解に苦しむのは次のような一節である。

《スタール夫人と話す。じわじわと，ついに，嵐。いわく，思いやりに欠ける。いわく，信頼できない。いわく，行為に感情が伴っていない。かくて，恐ろしい喧嘩騒ぎ，未明三時に至る。〔…〕 要するに，こちらの行為に感情が伴っていないというのなら，そんな行為は，あまり有り難がるふうでもないから，要求しないでくれればいいのだ。1804年9月7日》

感情といい，行為といい，行住坐臥，起居動作をともにするなかでの，思いのこもらぬ形式化された行為と感情表現に対する夫人の側の不満が考えられるが，この種の不満は友情関係にも起こり得るもの，たとえば，夜，夫人の傍らに侍り，その毎度の，深更に及ぶ長談弁説に生欠伸をかみころし，それを見咎められる。或いは，早々と部屋に下がれば，相手をしないといって，宵っ張り

の夫人から非難される，というようなくだりが日記にみられる。だが，気持のこもらぬ行為（義理）に対するスタール夫人の不満，非難は，果たして，「性ぬきの，白い関係」の場でのみ，議論詮索されるべき性質のものであろうか。「愛のことばなくして夜の明けぬ」，生涯，男遍歴を重ねたスタール夫人であるからには（その遍歴の最後の華は，22歳年下の青年ジョン・ロッカとの恋愛秘密結婚，妊娠出産であり，ときに夫人46歳であった），「行為」は閨房のさたを含んで然るべきではないか。すると，しかし，《二人のプラトニックな関係》の謎が残る。

最後に，謎が一層深まる記述の二，三――《スタール夫人，ここ数日，魅力にあふれ，不思議なほど優しい。夫人と一緒にいる真の喜びを再発見。±1804年9月1日》（符丁±：①と同じく，肉欲の快）――《爆発にいたらぬ喧嘩。③ — ② — ③ — ①。昨日発見の処理方法効を奏す。1805年11月1日》（符丁②：つねづね問題の，スタール夫人との永遠の関係を断つこと。符丁③：思い出や瞬時の魅力にすがって，この関係に戻ること）――昨日発見の処理方法とは，抑えきれぬ性欲処理のことである。肉欲の満足（①）なければ，夫人との絶交（②）は生理的必然，従って関係の復活（③）は不可能というコンスタンの「生理的」論理は，①の満足あれば③は可能なのである，つまり，肉欲と《精神愛》は両立することになる。その両立の理想は，相手は一人，同一人であるとし，それを，《快楽に嫌悪感なく，義務がすべての歓びと融和し，腕（かいな）を離れるや相手は再び人生の伴侶たる心友に変身，こちらの考えと趣味をともにする純粋結婚》と称し，自分には夢のようなことだが，という独白がある（1805年2月14日）。だが，その肉欲は，日記の記述を信じれば，外（別人）に向かう。はたして，稲妻の一刹那，内に（スタール夫人に）向かうことはないか。

> ながいことお互いを見てきた馴れ親しみ，ともにしてきた苦楽があれば，ふっとでるどんな言葉も仕草も，昔の思い出と無縁ではなく，そのために，二人はとつぜん過去の世界におしやられ，思わず二人の心は優しさに満ちるのであったが，それは，稲妻が闇をそのままに，ピカッと，夜陰を走るようなものだった。（『アドルフ』）

> 稲妻は，第二帝政期，オルガスムスの間接的な表現であった。（リファテール）

『アドルフ』は約半世紀先行するが，牽強付会，第二帝政期を先取りし，あえて，《稲妻》のこのようなイメージに則って読めば，③—①の関係は明らか，

しかも，相手は同一人（エレノール）である。逆に辿って，コンスタンとスタール夫人の愛憎違順にこの，《稲妻》の一瞬を見ることができないか。

『アドルフ』に性の直接の言及はないが，青年アドルフの感情と行動の背後には，コンスタンの日記にみられるセクシュアリテの謎が潜んでいるはずで，いずれ，そういう点から読み直し，行間にその謎を隠見させたい，というのがこの研究ノート執筆の動機である。

（1991年7月26日）